

研究ノート

老年看護教育プログラムが看護学生の 高齢者イメージ形成過程に影響する要因 (第2報) — 3年次における老年臨床看護論演習前後の比較 —



北村 隆子、畑野 相子、安田 千寿
滋賀県立大学 人間看護学部

背景 臨床現場における高齢者への看護内容は、看護師自身の高齢者のとらえ方によって左右される。さらにそれには、看護学生時代に構築される高齢者理解が影響を及ぼすともいえる。先行研究では講義・演習から実習までの一連の授業過程とイメージ変化の縦断研究や、一つの授業における前後のイメージ変化調査がされてきている。講義形式よりも演習や実習前後の方で高齢者の負のイメージが見られたり、あるいは実習終了後に正のイメージに変化していたりと様々な結果であった。看護援助に高齢者の特徴を盛り込んだ授業展開が、高齢者への関心を高めたり、イメージを変化させる上で重要であると考えられる。
目的 老年臨床看護論演習授業前後の高齢者イメージおよび老年看護学への関心度の変化を把握することである。

方法 A大学看護学生3年生56人を対象に、老年臨床看護論演習の授業開始前および終了後に、構成的質問紙を配布した。質問紙の内容は、学生の背景、Semantic Differential法による高齢者イメージ15項目、Visual Analogue Scaleによる老年看護学への興味・関心度であった。

結果 老年臨床看護論演習により、高齢者イメージの「役に立つ-役に立たない」、「明るい-暗い」、「積極的-消極的」、「強い-弱い」、「上品-下品」、「素直-頑固」、「考えが新しい-考えが古い」は、授業後にポジティブなイメージを持つ学生の割合が有意に多くなった。また、老年臨床看護論演習による老年看護学への興味・関心度の変化は、授業後に有意に高くなった。

結論 演習の授業後に高齢者に対するポジティブなイメージを持つ学生の割合が、授業前に比べ有意に増加した。これは、グループ別のロール・プレイング等の体験学習が、学生の内面に働きかけた結果とも考えられる。

キーワード 老年看護学、看護学生、高齢者イメージ

I. 緒言

臨床現場における高齢者への看護内容は、看護師自身の高齢者のとらえ方によって左右される。さらにそれには、看護学生時代に構築される高齢者理解が影響を及ぼすともいえる。

平成21年度から施行された今回のカリキュラム改正を受け、本学においては老年看護学の授業内容に変更が生じた。改正カリキュラムにおける老年看護学の授業構築のいっそうの充実を図るために、20年度から老年看護学の各授業において高齢者イメージと授業との関連を調査してきた。

先行研究においては、講義・演習から実習までの一連の授業過程とイメージ変化の縦断研究や、一つの授業における前後のイメージ変化調査がされてきている。講義形式よりも演習や実習前後の方で高齢者の負のイメージが見られたり¹⁾、あるいは実習終了後に正のイメージに変化していたり²⁾、著者によって結果は様々であった。したがって、一概に授業後にイメージがよくなると結論づけることはできない。ただ単に看護学生の高齢者イメージをよくすることが、重要なわけではない。高齢者がなぜそのような表現をするのかの根拠を考えながら、捉えていくことが必要である。

本学の老年看護学の開講時期は、現行のカリキュラムでは1年次後期から開始されている。本研究の対象となる老年臨床看護論演習は、3年生の前期に開講されている科目であり、この演習の履修後、つまり後期に老年臨床看護論実習を履修する。またこの科目は、高齢者の理

2009年9月30日受付、2010年1月9日受理

連絡先：北村 隆子

滋賀県立大学人間看護学部

住 所：彦根市八坂町2500

e-mail: tkitamura@nurse.usp.ac.jp

解の基礎となる高齢者概論・保健部門(本学では「発達看護論」の科目名で1年時後期、2年次前期に開講している)を受けての授業である。したがって、本研究の授業では、高齢者の発達を理論的に捉えながら具体的な援助方法を教授している。

そこで本研究は、老年臨床看護論演習授業前後の高齢者イメージや関心度の変化を把握することを目的とする。

II. 老年臨床看護論演習の授業内容

授業の開講時期は、3回生前期(1単位・30時間)であった。各回の詳細は、表1に示した。また、授業の概要と到達目標は、下記の通りであった。

- ・概要：医療施設、老健施設、福祉施設など様々な場所で展開されている高齢者への看護実践を行うために必要な知識・技術を習得する。高齢者の身体・精神・社会変化に対して科学的根拠に基づき、それら3側面を統合した判断力を培う。
- ・到達目標：老年看護実践のための基礎となる知識、技

術の習得ができる。

1. 教員側からの演習課題の提示

1～7回までの授業内容は、脳血管疾患事例の看護過程を示し、看護計画に沿った演習内容とした。

2. グループによる看護実践内容の発表

9～13回は、10グループ(1グループ5～6人)がそれぞれ脳梗塞事例(3グループ)、心不全事例(4グループ)、大腿骨頸部骨折事例(3グループ)について看護過程展開を実施し、それぞれのグループが一つの看護問題およびその看護計画を取り上げロール・プレイングを行った。グループによる発表までには、次の過程を踏んだ。

- 1) 事例毎に担当グループが集まり、グループが発表する看護計画の重複がないように調整を行った。また、それぞれのグループの看護問題・計画の位置づけを確認した。
- 2) グループで看護問題に対する看護計画の具体的立案を行った。その間、教員との間に2～3回のディスカッション

表1 21年度老年臨床看護論演習(授業内容)

回数	テーマ	内容
1	情報の統合と看護診断	
2	看護計画立案・評価・修正	
3	看護技術1 坐位について考える	坐位のメリット、デメリット、安楽な体位について考える
4	看護技術2 フットケアについて考える	高齢者のフットケアの意義および技術を習得する
5	看護技術3 食形態について考える①	経管栄養法について理解する、経鼻カテーテルの挿入体験
6	看護技術4 食形態について考える②	食形態と食感の違いを理解し、誤嚥予防を含めた摂食援助方法を考える
7	看護技術5 排泄方法について考える	安楽なおむつ交換の方法を考える。おむつでの排泄、行動体験を行う
8	看護技術6 摂食・嚥下障害時の食事援助方法	摂食・嚥下障害看護認定看護師による特別講義
9～13	看護技術7～11 高齢者看護に必要な技術を立案し、グループによる実践発表を行う	*心不全患者: 転倒予防、活動耐性低下、セルフケア不足、非効果的治療管理 *大腿骨頸部骨折患者: 身体可動性障害、排泄セルフケア不足、気力体力減退 *脳梗塞患者: 身体可動性障害、便秘リスク、誤嚥リスク
14	看護技術12 認知症を有する高齢者の援助方法	認知症専門看護師による特別講義

ションを行った。

3) 立案した看護計画に沿って、看護計画実施の練習を行った。計画の実施においては、ハード面とソフト面の二側面を押さえた。ハード面においては、基礎看護技術で学んだ援助技術の基本をもとに高齢者の特徴を組み込められるように配慮した。ソフト面においては、コミュニケーション技術に配慮した。

3. 特別講義の実施

摂食・嚥下認定看護師による特別講義は、食の演習が終了した時点で行った。また、一般病棟に入院する高齢者の認知機能低下予防の重要性を考慮し、認知症専門看護師の特別講義を組み入れた。

III. 研究方法

1. 対象：調査対象は、A大学看護学生3年生56人であった。
2. 時期：調査は平成21年4月の授業開始直前(以下、授業前とする)、および7月の授業終了直後(以下、授業後とする)の2回に実施した。
3. 方法：調査方法は、構成的質問紙を配布した。質問紙の内容は、下記に示すとおりであった。

1) 授業前

祖父母との同居の有無、高齢者と話す機会の頻度、高齢者イメージ、老年看護学に対する興味・関心度

2) 授業後

高齢者イメージ、老年看護学に対する興味・関心度、授業で興味・関心の持てた項目三点の記載

- ・高齢者イメージは、大谷ら³⁾のスケールを用いた。これは大谷らが保坂ら⁴⁾のスケールに修正加筆したSemantic Differential法(以下、SD法とする)15項目であった。質問紙のイメージ表現は形容詞対であり、ポジティブイメージを左側に、ネガティブイメージを右側においた6段階評定であり、数値が高いほどポジティブイメージとした(表2)。
- ・老年看護学への興味・関心度は、Visual Analogue Scale(以下VASとする)を用いた(図1)。

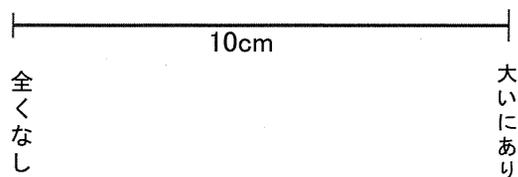


図1 授業への興味・関心度を測定するVisual Analogue Scale

表2 高齢者イメージ調査用紙

尊敬できる	6	5	4	3	2	1	尊敬できない
役に立つ							役に立たない
好き							嫌い
明るい							暗い
積極的							消極的
さっそうとしている							弱い
強い							冷たい
暖かい							厳しい
優しい							下品
上品							思いやりのない
思いやりがある							プライドが低い
プライドが高い							きたない
きれいな							頑固
素直							考えが古い
考えが新しい							

4. 分析方法

分析には、統計ソフトSPSS(Ver.16 for Windows)を用い、2群間の差の検定はWilcoxonの符号付き順位検定、3群間の差の検定はKruskal Wallis検定、関連2群間の差の検定はWilcoxonの符号付き順位検定を行った。統計学上の有意差は、有意水準5%を有意差ありとした。

5. 倫理的配慮

研究対象者となる学生が、教員から成績評価を受ける立場であることに配慮し、次の手順を踏み調査を行った。

1) 第1回目の授業開始前に下記の内容を説明した。

- (1) 質問紙の目的は、老年臨床看護論演習の授業内容と学生の高齢者イメージおよび関心度との関係を把握することであり、その結果を今後の授業内容構築に役立てるために実施するものであること。
- (2) 授業の初回と最終回に調査を実施する目的は、授業内容と学生が感じる高齢者イメージの変化を捉えるためであること。
- (3) 学生の高齢者イメージ、関心度の変化を把握するために、授業前後の質問紙の回答者をマッチングさせる必要があること、そのために質問紙に氏名、あるいは学生本人が記憶できる暗号などを記載してほしいこと。

- (4) (3)によって回答者がわかる場合があるので、回答は自由であること、同意できない場合は白紙で提出してもかまわないこと、また質問紙への記載内容・提出の有無が成績評価に影響しないこと。

2) 最終授業終了後には、授業開始前と同様の説明を行った。

3) 授業前後に回収された質問紙の入力は、前期の成績提出後に行った。

なお、公立大学法人滋賀県立大学研究に関する倫理審査委員会の承認を得た(平成20年 11月18日 第88号)。

IV. 結果

1. 対象者の属性

回答数は、授業前56人、授業後54人(うち無記名3人)であった。授業前後のデータが対応できるものを有効回答とした。したがって、分析対象は、50人(男子5人、女子45人)となった。

高齢者との同居経験は、現在同居している12人(24.0%)、かつてしていたことがある13人(26.0%)、したことがない25人(50.0%)であった。

高齢者と日常的に話す機会の度合いは、よく話す11人

(22.0%)、時々話す26人(52.0%)、話さない13人(26.0%)であった。

2. 高齢者イメージの変化

1) 授業前後のイメージ変化

授業前後の高齢者に対するイメージの評定を図2に示した。

授業前におけるイメージがネガティブ側(評定値[1][2][3])にあり、授業後にポジティブ側(評定値[6][5][4])に偏った項目は、「積極的」、「強い」、「素直」、「考えが新しい」であった。これら

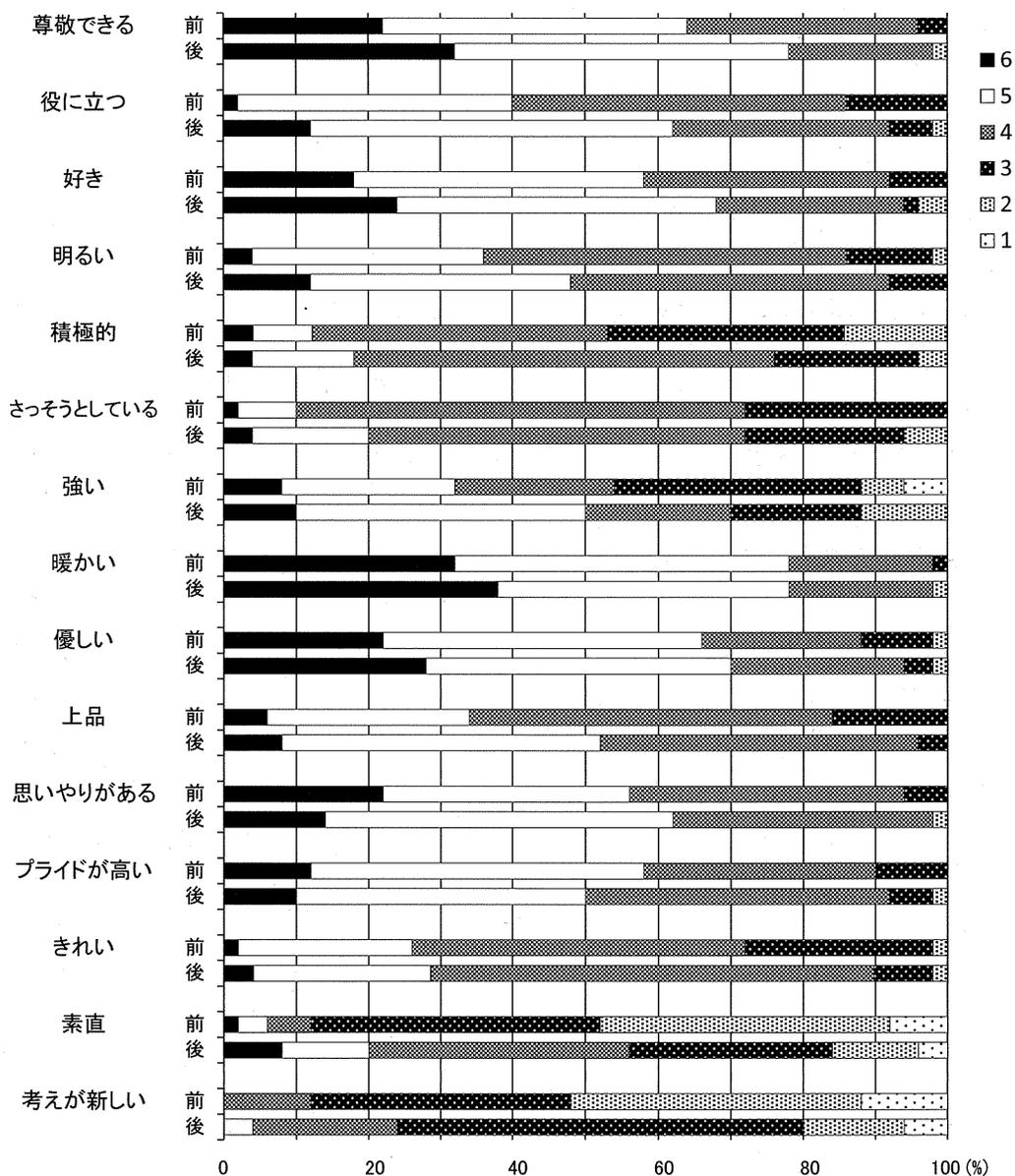


図2 高齢者に対するイメージについての授業前後の変化

の項目の評定毎の割合は次の通りであった。

「積極的」については授業前 [6] 4%(2人) [5] 8%(4人) [4] 40%(20人) [3] 32%(16人) [2] 14%(7人) [1] 0%、授業後 [6] 4%(2人) [5] 14%(7人) [4] 58%(29人) [3] 20%(10人) [2] 4%(2人) [1] 0%であった。

「強い」については授業前 [6] 8%(4人) [5] 24%(12人) [4] 22%(11人) [3] 34%(17人) [2] 6%(3人) [1] 6%(3人)、授業後 [6] 10%(5人) [5] 40%(20人) [4] 20%(10人) [3] 18%(9人) [2] 12%(6人) [1] 0%であった。

「素直」については授業前 [6] 2%(1人) [5] 4%(2人) [4] 6%(3人) [3] 40%(20人) [2] 40%(20人) [1] 8%(4人)、授業後 [6] 8%(4人) [5] 12%(6人) [4] 36%(18人) [3] 28%(14人) [2] 12%(6人) [1] 4.0%(2人)であった。

「考えが新しい」については授業前 [6] 0% [5] 0% [4] 12%(6人) [3] 36%(18人) [2] 40%(20人) [1] 12%(6人)、授業後 [6] 0% [5] 4%(2人) [4] 20%(10人) [3] 56%(28人) [2] 14%(7人) [1] 6.0%(3人)であった。

それぞれの項目における授業前後の評定値の示す割合は、「積極的」 $p<.01$ 、「強い」 $p<.05$ 、「素直」 $p<.001$ 、「考えが新しい」 $p<.001$ で、授業後に有意にポジティブ側に偏った。

授業前におけるイメージがポジティブ側にあり、授業後にさらにポジティブ側に偏った項目は、「役に立つ」「明るい」「上品」であった。これらの項目の評定毎の割合は次の通りであった。

「役に立つ」については授業前 [6] 2%(1人) [5] 38%(19人) [4] 46%(23人) [3] 14%(7人) [2] 0% [1] 0%、授業後 [6] 12%(6人) [5] 50%(25人) [4] 30%(15人) [3] 6%(3人) [2] 2%(1人) [1] 0%であった。

「明るい」については授業前 [6] 4%(2人) [5] 32%(16人) [4] 50%(25人) [3] 12%(6人) [2] 2%(1人) [1] 0%、授業後 [6] 12%(6人) [5] 36%(18人) [4] 44%(22人) [3] 8%(4人) [2] 0% [1] 0%であった。

「上品」については授業前 [6] 6%(3人) [5] 28%(14人) [4] 50%(25人) [3] 16%(8人) [2] 0% [1] 0%、授業後 [6] 8%(4人) [5] 44%(22人) [4] 44%(22人) [3] 4%(2人) [2] 0% [1] 0%であった。

それぞれの項目における授業前後の有意水準は「役に立つ」 $p<.005$ 、「明るい」 $p<.05$ 、「上品」 $p<.05$ であった。

2) 高齢者と同居の有無による高齢者イメージ

高齢者との同居の有無とイメージとの関連は、「強い」において「かつて同居していた」群と「同居したことがない」群との間に有意な差を認めた($p<.05$)。

「かつて同居していた」群では授業前 [6] 7.7%(1人) [5] 46.2%(6人) [4] 23.1%(3人) [3] 15.4%(2人) [2] 7.7%(1人) [1] 0%、「同居したことがない」群では [6] 0% [5] 16%(4人) [4] 24%(4人) [3] 40%(10人) [2] 8%(2人) [1] 12%(3人)であった。

授業後は、15項目すべてにおいて3群間に有意な差を認めなかった。

3) 高齢者と話す頻度の違いによる高齢者イメージ

高齢者と話す機会の頻度別による高齢者イメージの評定を図3に示した。

授業前イメージが、高齢者と話す機会の頻度別により有意な差を認めた項目は、「役立つ」、「さっそうとしている」、「暖かい」、「優しい」、「きれい」であった。

「役立つ」では、「よく話す」群 [6] 0% [5] 72.7%(8人) [4] 27.3%(3人) [3] 0% [2] 0% [1] 0%、「ときどき話す」群 [6] 0% [5] 34.6%(9人) [4] 53.8%(14人) [3] 11.5%(3人) [2] 0% [1] 0%、「話さない」群 [6] 7.7%(1人) [5] 15.4%(2人) [4] 46.2%(6人) [3] 30.8%(4人) [2] 0% [1] 0%であった。「よく話す」群が「時々話す」群「話さない」群よりも有意にポジティブ傾向にあった($p<0.05$)。

「さっそうとしている」では、「よく話す」群 [6] 9.1%(1人) [5] 18.2%(2人) [4] 72.7%(8人) [3] 0% [2] 0% [1] 0%、「ときどき話す」群 [6] 0% [5] 7.7%(2人) [4] 69.2%(18人) [3] 23.1%(6人) [2] 0% [1] 0%、「話さない」群 [6] 0% [5] 0% [4] 38.5%(5人) [3] 61.5%(8人) [2] 0% [1] 0%であった。「よく話す」群が「時々話す」群よりも($p<.05$)、「話さない」群よりも($p<.005$)、「時々話す」群が「話さない」群よりも($p<.05$)、有意にポジティブ傾向にあった。

「暖かい」では、「よく話す」群 [6] 63.6%(7人) [5] 36.4%(4人) [4] 0% [3] 0% [2] 0% [1] 0%、「ときどき話す」群 [6] 15.4%(4人) [5] 50.0%(13人) [4] 34.6%(9人) [3] 0% [2] 0% [1] 0%、「話さない」群 [6] 38.5%(5人) [5] 46.2%(6人) [4] 7.7%(1人) [3] 7.7%(1人) [2] 0% [1] 0%であった。「よく話す」群が「時々話す」群よりも有意にポジティブ傾向にあった($p<.005$)。

「優しい」では、「よく話す」群 [6] 45.5%(5人)

[5] 54.5%(6人) [4] 0% [3] 0% [2] 0%
 [1] 0%、「ときどき話す」群 [6] 15.4%(4人)
 [5] 38.5%(10人) [4] 30.8%(8人) [3] 11.5%(3人)
 [2] 3.8%(1人) [1] 0%、「話さない」群

[6] 15.4%(2人) [5] 46.2%(6人) [4] 23.1%(3人)
 [3] 15.4%(2人) [2] 0% [1] 0%であった。
 「よく話す」群が「時々話す」群よりも(p<.01)、「話さない」群よりも(p<0.05)、有意にポジティブ傾向

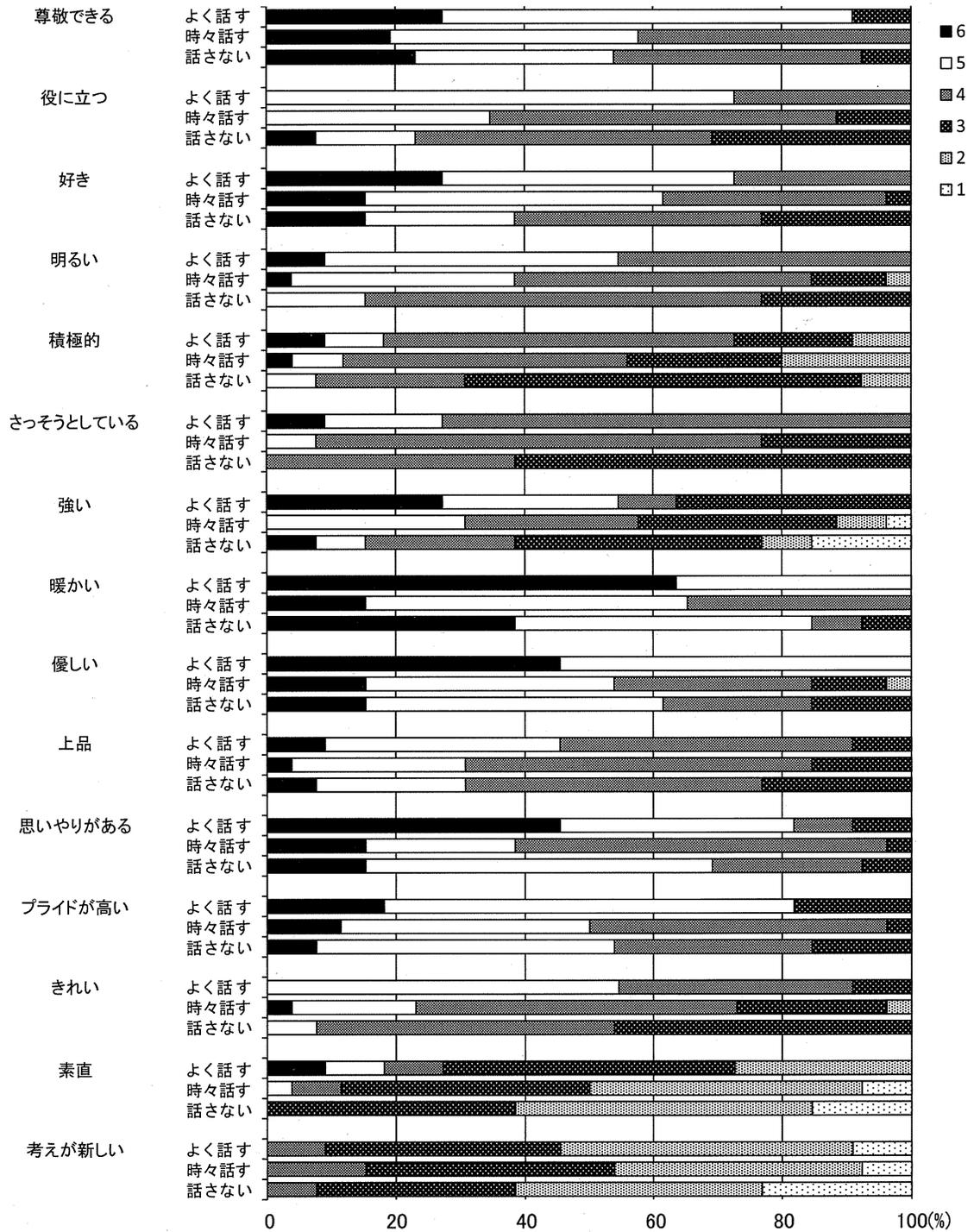


図3 高齢者との話す機会と授業前のイメージとの関係

にあった。

「きれい」では、「よく話す」群 [6] 0% [5] 54.5%(6人) [4] 36.4%(4人) [3] 9.1%(1人) [2] 0% [1] 0%、「ときどき話す」群 [6] 3.8%(1人) [5] 19.2%(5人) [4] 50.0%(13人) [3] 23.1%(6人) [2] 3.8%(1人) [1] 0%、「話さない」群 [6] 0% [5] 7.7%(1人) [4] 46.2%(6人) [3] 46.2%(6人) [2] 0% [1] 0%であった。「よく話す」群が「話さない」群よりも有意にポジティブ傾向にあった(p<.01)。

授業後は、15項目すべてにおいて3群間に有意な差を認めなかった。

3. 授業前後における老年看護学への興味・関心の変化

老年看護学への興味・関心についてのVAS値は、授業前6.1±1.8 cm、授業後7.5±1.4 cmであり前後に有意な差を認めた(p<.001)。同居の有無、話す機会の頻度においては授業前・後ともに各群間に有意な差を認めなかった。

4. 興味・関心が持てた授業内容

老年臨床看護論演習を通して興味・関心が持てた授業内容の一覧を、表3に示した。計14回の授業を通して興味・関心の持てた内容を三つ記述してもらった。記載された内容の延べ数は、139件(平均記述数2.8個)であった。記載内容は、グループ発表31件(22.3%)、嚥下食事29件(20.9%)であった。

表3 老年臨床看護論演習の興味・関心が持てた内容

	件数	%
経鼻	8	5.8
食事	29	20.9
フットケア	8	5.8
排泄	20	14.4
安楽な座位	7	0.5
グループ発表	31	22.3
認知症の特別講義	16	11.5
嚥下の特別講義	19	13.7
全体的な体験学習	1	0.7
計	139	100

V. 考察

1. 対象者の属性と高齢者イメージとの関係

学生の高齢者との同居率は、過去の経験も踏まえると50.0%(25人)であった。これは、大谷ら³⁾の同居率38.7%、兎澤ら⁵⁾の同居率46%に近い値であった。近年核家

族化が進み人口静態調査⁶⁾においても2008年の三世帯構成が8.8%との報告に比べると、今回の調査対象者の同居率は高く、地域性の影響も伺える。

同居経験とイメージとの関係では、唯一「強い-弱い」において「かつて同居していた」群が「同居したことがない」群よりもポジティブなイメージの傾向にあった。しかし、他のイメージ項目において有意な差を認めなかったことは、渡邊ら³⁾が述べるように高齢者と同居していても、同居という形態だけであり、高齢者と接する機会には関連していないために、高齢者像には影響を及ぼさないと考えられる。

高齢者との会話頻度とイメージとの関係では、同居経験の有無に比べ、会話頻度の間に有意にポジティブイメージを示す項目が多かった。今回の調査では、会話対象者を学生の祖父母とは限定せずに「高齢者と話す機会」と記載して質問した。学生がどの高齢者を想定して質問紙に答えているかはわからないが、「話す」と言うことは、高齢者と直接の接触があるために、高齢者像に違いをもたらしていると考えられる。

同居経験の有無および話す機会の頻度別による高齢者イメージの違いは、授業前には差を認めた項目があったが、授業後には見られなかった。授業後には差がなかったことは、授業内容が何らかの影響を及ぼしたと考えられる。

2. 授業と高齢者イメージとの関係

授業前の高齢者イメージでネガティブ傾向にあった「積極的-消極的」、「強い-弱い」、「素直-頑固」、「考えが新しい-考えが古い」は、授業後にはネガティブなイメージを持つ学生の割合が減り、ポジティブなイメージを持つ学生の割合が増えていた。今回の我々の調査では、浅井ら¹⁾の授業によりイメージが負の方向に変化したことは逆の結果となった。

浅井ら¹⁾は負への変化に対して、介助が必要な生活体験中心であった演習内容が影響していると述べている。また、名倉ら⁷⁾は臨床看護をする上で必要な高齢者の健康障害に関する内容が必然的に多くなるのでマイナスイメージが強くなったと述べている。我々の演習においても、その内容は「嚥下障害」、「排泄(おむつ体験)」など高齢者の「できない部分」すなわち「看護問題」に焦点を当てた演習であった。しかし、教育上配慮した点は、問題に至った根拠を考えることと、高齢者の強みを引き出すことであった。ポジティブなイメージに変化した詳細は今回は明確にはならないが、できない部分への援助であっても常に「できること」を取り入れることに学生の目を向けさせたことがイメージの変化に影響していると考えられる。

また、演習内容はグループによるロール・プレーイン

グを含んでいた。兎澤ら⁵⁾は高齢者疑似体験学習は看護大学生の内面に働きかける学習であることを述べている。各グループ演習への学生指導は、看護計画立案から援助技術までに4～5回行っている。近藤ら⁸⁾が学習は知識を得ていく場であると同時にイメージを変える場にもなりうると述べている。同様に、ロール・プレーイング発表までの学習過程が、高齢者に対する何らかのイメージ変化を起こしたのかもしれない。さらに、この学習過程が、老年看護学への関心度の高まりにも影響したと考えられる。

今回、高齢者看護の実践を学ぶ演習にロール・プレーイングを取り入れたことで、高齢者に対するとらえ方の変化を起こしたと考える。しかし、藤巻ら⁹⁾が述べるように、高齢者イメージが肯定的になることが目標ではなく、教員は学生がイメージしたポジティブ、ネガティブ両方を受け止めることが大切である。ロール・プレーイングを通して、高齢者の示す様々な言動を客観的に捉えられるように教授していくことが必要である。今回の調査結果からは、どの授業方法に効果があったのかを具体的に述べることはできない。今後の課題として、学生が高齢者看護を学んで行くに当たり、「なぜそのように考えたのか」という学生の思考過程を構築できるように、それぞれの演習内容について検討していくことが必要であると考える。

VI. 結 語

老年臨床看護論演習授業前後の高齢者イメージや関心度の変化を把握することを目的とし、A大学看護学生に質問紙調査を行った結果、以下のことが示唆された。

1. 老年臨床看護論演習により、高齢者イメージの「役に立つ-役に立たない」、「明るい-暗い」、「積極的-消極的」、「強い-弱い」、「上品-下品」、「素直-頑固」、「考えが新しい-考えが古い」は、授業後にポジティブなイメージに有意に変化した。
2. 老年臨床看護論演習による老年看護学への興味・関心度の変化は、授業後に有意に高くなった。

謝 辞

老年臨床看護論演習の授業前後における質問紙調査にご協力いただいたA大学看護学生3回生の皆様に感謝致します。

文 献

- 1) 浅井さおり、沼本教子、柴田明日香：老人看護学学習過程における学生の高齢者イメージ変化の縦断的調査、日本看護学教育学会誌、16(1)、53-61、2006.
- 2) 渡邊裕子、倉田トシ子、森田祐代：看護学生の高齢者イメージに関する研究－老年学講義開始前から老年学臨地実習Ⅱ終了までの変化－、山科県立看護大学短期大学部紀要、11(14)、159-166、2005.
- 3) 大谷英子、松木光子：老人イメージと形成要因に関する調査研究(1)大学生の老人イメージと生活経験の関連、日本看護研究学会誌、18(4)、25-37、1995.
- 4) 保坂久美子、袖井孝子：大学生の老人観、老年社会科学、8、103-106、1986.
- 5) 兎澤恵子、古市清美、高木タカ子：看護大学生の連続学習による高齢者イメージ変化、群馬パース大学紀要、3、47-53、2006.
- 6) 厚生統計協会：国民衛生の動向、56(9)、41、2009.
- 7) 名倉順子、天下井深雪：高齢者のイメージに影響を及ぼす要因、神奈川県立平塚看護専門学校紀要、12、8-13、2006.
- 8) 近藤ふさえ、丸山昭子：看護学生の高齢者とのかわり体験と高齢者イメージとの関連性、日本医学看護学教育学会誌、13、18-25、2004.
- 9) 藤巻尚美、流石ゆり子、牛田貴子：「健康高齢者実習」プログラムに高齢者疑似体験を組み入れた学習効果(第2報)－高齢者の活動性・自立性のイメージに焦点をあてて－、山梨県立大学看護学部紀要、10、93-101、2008.

(Summary)

Factor that geriatric nursing education programs influence on
elderly people image formation of nursing students

(The second report)

—Comparison before and after Gerontological Clinical Nursing and Exercise—

Takako Kitamura, Aiko Hatano, Chizu Yasuda

School of Human Nursing, The University of Shiga Prefecture

Key Words Geriatric nursing, nursing students, elderly people image